# 吉野川流域における方言の動態（１）

岸江信介[1)]・野田和子[2)]・林　美佳[3)]
川島竜太[4)]・石田祐子[5)]

## １．はじめに

徳島県の方言についてはこれまで多くの調査研究及びその報告がなされてきた。全県下を対象として、語彙・語法・アクセントにおける地理的研究や記述的研究が先行研究者によって行われている。今回、ここで取り上げる吉野川流域も多くの方言研究者がフィールドワークの対象としてきた地域である。

吉野川流域の方言は、森重幸（1982）によって徳島市域から名西郡山川町に至る下郡（しもごおり）方言と美馬郡・三好郡（いずれも平坦部）の上郡（かみごおり）方言に分割される。両方言の境界は麻植郡山川町川田と美馬郡穴吹町穴吹の間にある川田トンネルであることも古くから注目されてきた。この境界は言語の境界線のみならず、吉野川の西の文化と東の文化を分かつ境界線でもあった。

以下では1998年度、岸江信介が徳島大学総合科学部の授業の一環として行った吉野川流域（南岸）のグロットグラム調査をもとにして、当地域の方言の動態について、地域差と世代差の観点から言及してみたいと思う。

## ２．調査概要

吉野川流域南岸において、平成10年７月30日～８月24日にかけて徳島市～池田町間に存する集落での方言グロットグラム調査（地点×世代）を実施した。調査地点は徳島市・池田町を含む22地点（南岸のみ）で各地点５世代の話者に調査員が面接し、次の２つの調査を実施した。

①調査票に基づく調査
②アクセント表読み上げによる調査

話者５世代の区分は以下の通りとした（年齢は平成10年８月現在）。

① 大正12年以前に生まれた者（75歳以上の方）
② 大正13年～昭和13年までに生まれた者（74歳～60歳までの方）
③ 昭和14年～昭和28年までに生まれた者（59歳～45歳までの方）
④ 昭和29年～昭和44年までに生まれた者（44歳～30歳までの方）

---

1）徳島大学助教授　2）徳島大学院生　3）徳島大学院生　4）徳島大学学生　5）徳島大学学生

⑤　昭和45年以降に生まれた者（29歳以下の方）

以上の世代区分のうち、①に該当する話者を「古老層」、同じく②「老年層」、③「壮年層」、④「中年層」、⑤「若年層」と便宜的に呼ぶことにする。なお、話者は各地点各層につき、1名ずつとした。話者の選出については当該の市町村役場及び教育委員会にお願いし、条件に該当する方々を斡旋頂いた。

調査員は、村中淑子（総合科学部助教授）、野田和子・林美佳（以上、大学院1年生）・川島竜太（4年生）のほか、上記、『日本言語文化論基礎資料研究Ⅰ』（前期）の受講生として、渋谷景子・新田忍・前村和美・石田祐子・笠井薫・森裕子・中村泉（以上3年生）、早渕百合子・坂本藍子・松本恵子・岩崎里佳・鈴木雅子・至極千尋・平野優子・三宅理代・大木園子・岩佐美紀・中尾一仁・村上香織・奥津直美・北川美紀・土井清香・篠原のぞみ（以上2年生）、共通教育『日本語学』受講生の高嶋瓢吉（1年生）、岸江信介（総合科学部助教授）である。調査地域及び調査地点は以下の通りである。

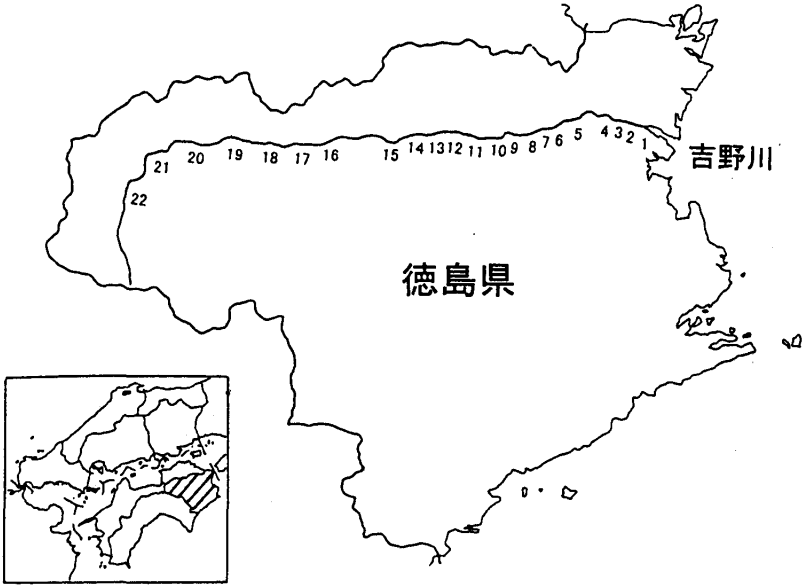



図　1

**調査地点番号及び調査地点名**

1．徳島市旧市内
2．徳島市佐古
3．徳島市蔵本町
4．徳島市国府町
5．名西郡石井町石井
6．名西郡石井町下浦
7．麻植郡鴨島町牛島
8．麻植郡鴨島町鴨島
9．麻植郡鴨島町西麻植
10．麻植郡川島町川島
11．麻植郡川島町学
12．麻植郡山川町山瀬
13．麻植郡山川町山川
14．麻植郡山川町川田
15．美馬郡穴吹町穴吹
16．美馬郡貞光町貞光
17．美馬郡半田町半田
18．三好郡三加茂町江口
19．三好郡三加茂町加茂
20．三好郡井川町辻
21．三好郡池田町池田
22．三好郡池田町三縄

## 3．吉野川流域（南岸）にみられる方言動態

吉野川流域において、東西を分ける方言境界は早くから注目されてきた。平山輝男（1957）が夙に「京阪式Ⅰ」（徳島式アクセント）と「京阪式アクセントⅣ」（讃岐式アクセント、池田町アクセント）を指摘し、森重幸（1958）、加藤信昭（1968）・関口美智代（1988）はアクセント面に着目して、この境界線[6]が麻植郡山川町川田（14）と美馬郡穴吹町穴吹（15）との間にあることを報告した。更に森重幸（1982・1989）は県下全域数百地点に及ぶ方言調査を通じて、アクセント面のみならず、語彙・語法面からも方言境界線を引き、徳島県下の方言区画を試みている。本稿では、特に森重幸（1982）及び上野和昭（1997）が示した語彙・語法上の境界線の結果を今回の調査で取り上げた項目との比較・検討を行い、当地域における言語変化の動態について言及する。

まず、**表1**は理由を表す接続助詞「～から」に関する調査結果である。森重幸（1982）によると、吉野川流域においてこの項目にみられるケン（ケニ）とキン（キニ）の分布対立は下郡と上郡との両方言を分けた根拠の一つとなっている。この境界線は更に北に延び、香川県方言における東讃方言と西讃方言との境界線にもなっている（香川県方言研究同好会1996）。すなわち、両形式の分布の境界線は徳島県から香川県へと続いているのである。森重幸（1982）が示したケン（ケニ）とキン（キニ）の分布は今回の調査で大きな変化があったことが明らかになった。まず、ケンとケニ、キンとキニではそれぞれ後者の形式が衰退しており、ケニ、キニは共に古老層にわずかに認められるに過ぎなくなった。

キン（キニ）とケン（ケニ）はかつて東西での分布勢力が拮抗していたとみられるが、表1から分かるように、キン（キニ）が穴吹町穴吹（15）以西にみられるものの、下郡方言のケンが西進しており、上郡方言におけるキン（キニ）の分布が脅かされようとしている。事実、上郡地域ではキンとケンを併用している話者が多く、キンは当地域で中・壮年層より上の世代にその使用が限定されてきているといえよう。すなわち、上郡地域ではキニからキンへの変化、更に、キン専用からケンとの併用、そしてキンの衰退という動きが看て取れる[7]。

---

6）先に述べたように、今回のグロットグラム調査では調査票に基づく調査とアクセント読み上げ調査を実施したが、本稿では調査票に基づく調査で得られた結果を紹介することにとどめ、アクセントの調査結果については別に機会に譲る。なお、アクセント調査の結果の一部（2拍名詞第1類・第3類の統合状況）に関するグロットグラム表については既に阿波学会編（1999刊行予定）に掲げた。

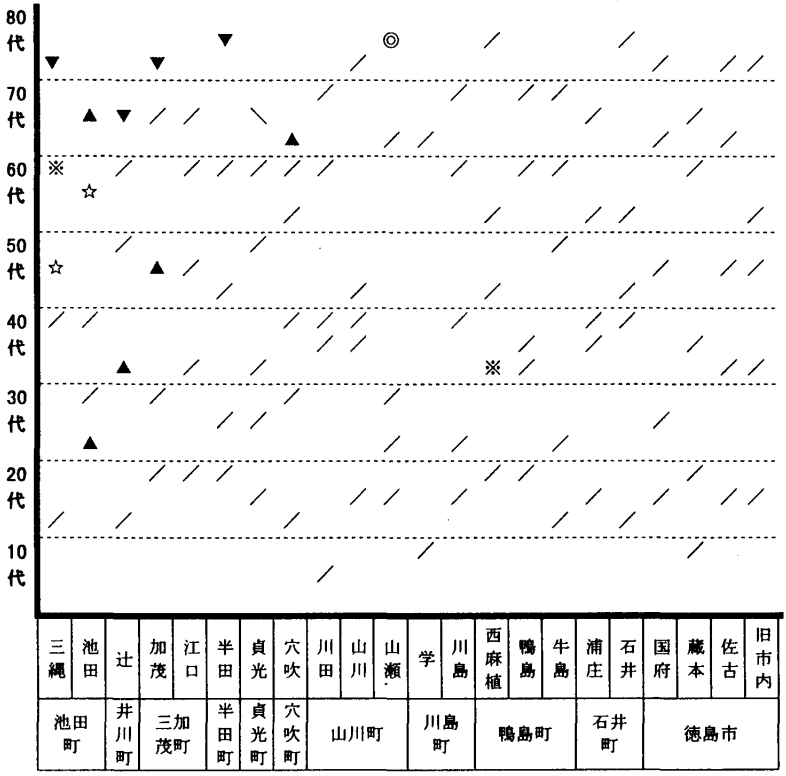
7）本調査では表1の項目とは別にケン・ケニ・キン・キニについて、それぞれ独自の調査項目を立て、それぞれの形式について「使用する・聞くことはあるが使用しない・聞いたこともない」という形で質問を行っている。これらの結果をすべて表に掲げることは紙幅の都合上できなかった。ここで簡単に各形式の分布状況を記すと、ケンは吉野川流域全地域で「使用する」の回答が多かったのに対し、ケニは穴吹町穴吹（15）以東の古老層で「使用する」という回答がわずかにみられた程度である。一方、キン（**表2**）は穴吹町穴吹以西の中年層以上の世代に「使用する」が認められるが、ケンと併用しているというのが現状のようである。ただ、使用するかどうかの意識は、時に、実際の使用とは食い違いをみせることがある。池田町池田（21）の話者の老年層ではキンを「聞くことはあるが使用しない」と答えながらも、調査終了後などに実際の使用では幾度かキンを使っているのを確認した。その他、上郡地域の老年層以上の世代においても、キンなのかケンなのか、聴覚印象上、はっきりしない場合が多々あった。若年層ではケンのみを「使用する」という回答が圧倒的に多く、キンは老年層の言葉であるという意識がはっきりしている。キニはわずかに池田町三縄（22）など数地点の古老層にみられたに過ぎない。

## 吉野川流域・南岸（徳島市～池田町間）方言グロットグラム

*徳島大学国語学研究室*

〔項目名　～から（理由を表す接続助詞）〕　　*1998*

質問：「危ないから行くな」という時、「から」の部分をどう言いますか？




### 凡　例

▲ キン　▼ キニ　／ ケン　＼ ケニ　※ ノデ（ンデ）　☆ カラ　◎ 他語形

表　1

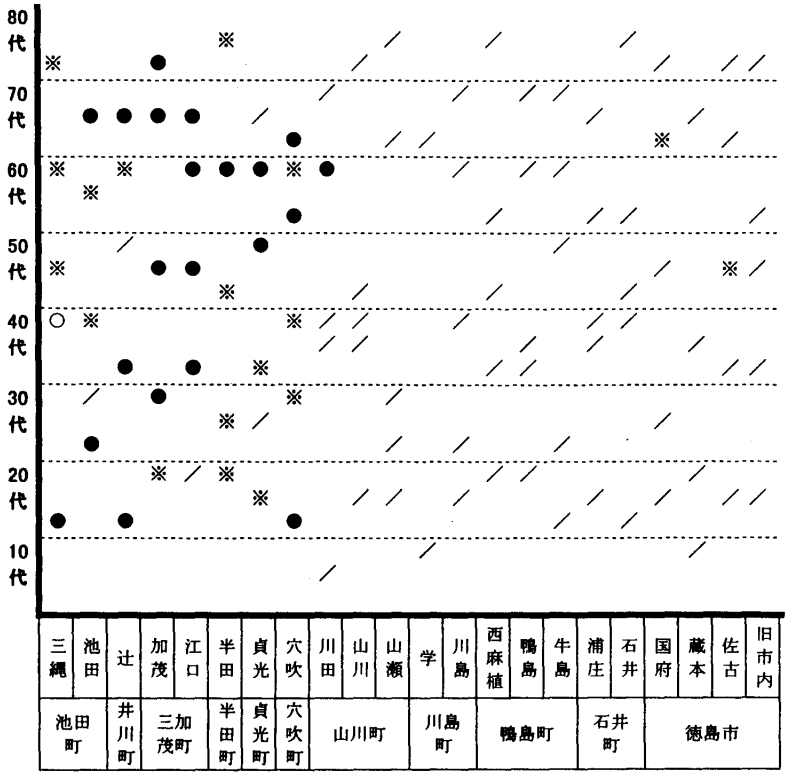
一方、下郡地域では、ほぼケン一色で勿論、キン（キニ）はみられない。ケニの使用もほとんどみられず（わずかに貞光町の古老層）、穴吹町山間部にある古宮（平成10年度阿波学会穴吹町学術調査で確認）などの古老層に残されている程度である。吉野川上流域でケンがキンに取って代わろうとする動きは徳島市という地方都市の県周辺域に対するプレスティージ（威光）による要因も考えられるが、一方、注７）でも触れたように、ケンはキンと聴覚印

## 吉野川流域・南岸（徳島市～池田町間）方言グロットグラム

*徳島大学国語学研究室*

〔項目名　理由を表す接続助詞－キンの使用－〕　　*1998*

質問：「危ないキンやめておく」というように、キンというような言い方をしますか？




### 凡　例

● 使う　※ 聞くことはあるが自分は使わない　／ 聞いたこともない

○ 昔は使った

表　2

象上似ているということが、ケンが受容されやすかった理由とみるべきなのかもしれない。

吉野川流域では京阪方言にみられるような伝統方言（サカイ）が衰退し、共通語形式カラを取り込むという動きは今のところなさそうである。森重幸氏による当項目の調査は、恐らく半世紀にも前に行われたものであろうか。ケンが勢力的に西進し、これまでの境界線を引き直す時期が迫ろうとしている。

**表3・表4**は「起きることができない（能力不可能）」に関する調査結果である。**表3**が「起きることができない」、**表4**はエーオキンという形式を用いるかどうかについて聞いている。上野和昭（1997）では森重幸（1982）にしたがい、これらの形式に関連する形式として、「することができない（能力不可能）」の形式をあげている。ヨーセンの分布が吉野川流域を含む徳島県北部域（上郡・下郡の北部寄りの地域）に、エーセンはこれよりも南部、吉野川の南岸を含めて、ほぼ県全域に拡がっている。なお、西祖谷山村・東祖谷山村方面にはエセンという形式がまとまって分布している。吉野川流域南岸にはヨーセンとエーセンがまたがって分布しているということになる。ヨーセン・エーセンの分布とエーオキン・ヨーオキンの分布とを直ちに同じであるとみなすことは少々危険であるが、能力不可能という観点からは恐らく両者の分布は酷似しているものと考えられる。

**表3**の結果からみていくことにしたい。まず、エーオキンとヨーオキンが広く分布しているが、エーオキンの分布が鴨島町牛島以西の老年層以上の世代に限り認められるのに対して、ヨーオキンは全域・全世代で広く認められる。このことからエーオキンは当地域でまさに消滅寸前の形式であり、ヨーオキンはエーオキンに代わる形式であるということができよう。また、**表4**はエーオキンを使うかどうかについて聞いた結果であるが、**表3**との比較では使用すると答えた話者が**表4**では更に増えている。これはエーオキンとヨーオキンとを併用する話者が多いことを示す[8]とともに、これらの形式を併用する話者の多くはエーオキンを古い形式であると内省報告するものが相次いだ。

ところで、徳島市から西に行くにつれて、このヨーオキンの地域に更に新しいと思われる形式が入り込んでいる様子が窺える。オキレンがその形式で、徳島市内の老年層から池田町の若年層にかけて斜交いにその分布が拡がっていることが確認された。オキレンは徳島市内からヨーオキンの分布域に西へと西へと徐々に浸透しており、その侵攻はまず若年層を襲い、中年層、そして老年層へと移行していったとみられる。ヨーオキンからオキレンへの変化は今なお進行中であり、今後、ヨーオキンはオキレンに完全にとって代わられることになるものと思われる。また、オキレンよりも更に新しいと思われる形式がオキラレヘンである。現在、徳島市内及びその近郊の若年層にしか使用されていないが、この形式は今後、勢力を増大し、ヨーオキンやオキレンを追討していくものと予想される。打消の助動詞ンとヘンの関連を次の表以降に掲げているが、これらの調査結果と比較しても、このことが裏づけられよう[9]。また、オキラレヘンは現在、大阪市方言などの若年層でもっとも有力な形式であり、

---

8）表3では第1回答のみをプロットしているので、併用回答をした場合の第2・第3回答はプロットしていない。

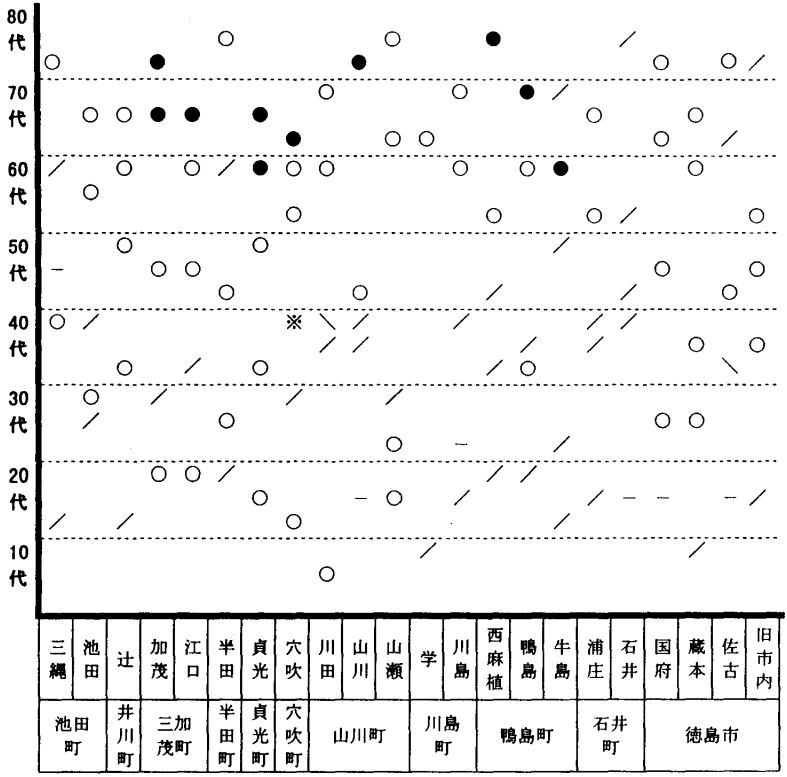
9）オキレンに代わりオキラレヘンが今後、台頭する兆しがみられることを指摘した。現在、両形式を併用している話者では何某かの使い分けが起きているかもしれない。併用の場合、同じ意味を表すのに2つの形式が存するという不合理性に対して修正が行われ、両形式が意味を分担することで棲み分けるということがよくある。しかし、この**表3**を見る限りではオキラレヘンが若年層を中心に拡がっており、いずれはオキレンの分布域に拡がり、オキレンが衰える公算が高いと予想される。その理由として、打消の助動詞ンからヘンへの変化が着実に進んでいることがあげられ、この変化とともにオキレンからオキラレヘンへの変化も並行していくと思われるからである。

## 吉野川流域・南岸（徳島市～池田町間）方言グロットグラム

*徳島大学国語学研究室*

〔項目名　起きることができない（能力不可能）〕　　*1998*

質問：　「明日は５時に起きることができるか」と聞かれて、「そんなに早くは起きることができない」という場合、「起きることができない」の部分をどう言いますか？




**凡　例**

● エーオキン　○ ヨーオキン　／ オキレン　＼ オキラレン　－ オキラレヘン

**表　3**

関西中央部方言の地方都市への影響という観点から今後、徳島市内で受容されていく可能性は大きいと思われる。

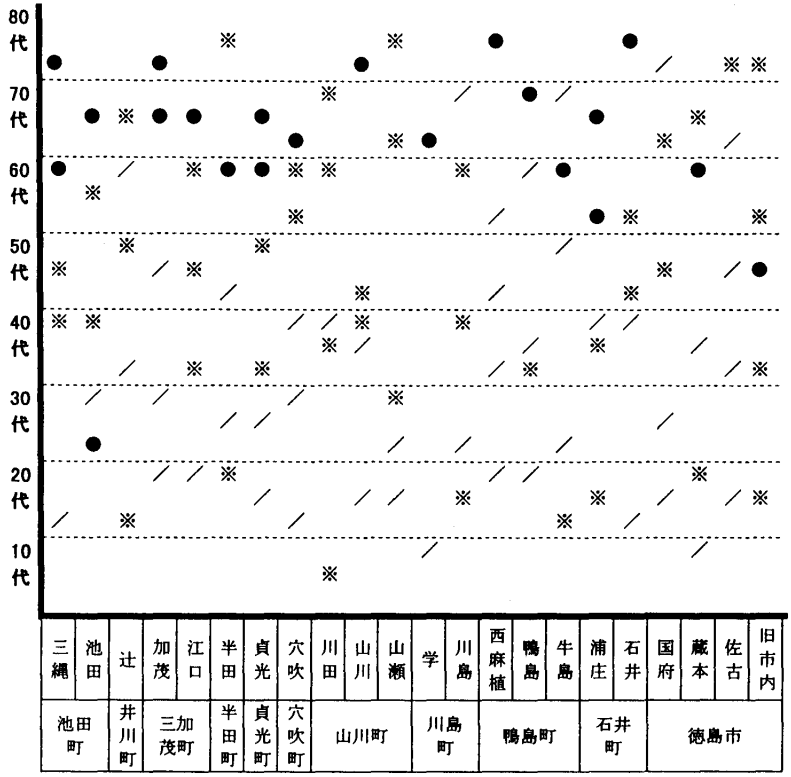
打消形式におけるンとヘンの交替に関し、以下の２つのケースについてみることにしたい。これらの変化は吉野川流域で起こっている最も注目すべき動きの一つで、近畿中央部方言が

## 吉野川流域・南岸（徳島市～池田町間）方言グロットグラム

*徳島大学国語学研究室*

〔項目名　エーオキン〕　　*1998*

質問：「起きることができない」というのを「エーオキン」ということがありますか？




凡　例

● 使う　※ 聞くことはあるが自分は使わない　／ 聞いたこともない

表　4

四国地方へ流入したケースとして特徴づけられる。

打消の助動詞は共通語のナイに対して、西日本の大半の地域ではンが用いられる。また、東日本のナイに対して、西日本のンが対立するとされてきたが、近畿中央部ではンと並行して、ヘンが用いられる。行かンなどのンは「行かぬ」からの変化であるのに対し、ヘンは「行

きはせぬ（行きはしない）」→イキャセヌ→イカセン→イカヘンといった過程を経て生じた形式である。一昔前まで、ンとヘンは「行かン（強消）」、「行かヘン（弱消）」というように、大阪では意味機能を異にし、使い分けられていた（前田 1977・山本1982）が、現在ではこのような使い分けが存しなくなっている。というよりも、京阪方言ではンが衰退し、言い切り形などには全く現れなくなっていると言っても過言ではなく、打消の助動詞ヘンに統合しているのである。

**表5**・**表6**では「行かない」・「見ない」を取り上げたが、吉野川流域ではンとヘンのせめぎ合いの状況をこれら2つの表からみることができる。両表ともに、ンが下接した形式（イカン・ミン）の使用地域にヘンが下接した形式（イケヘン・ミーヘンなど）が徳島市内から池田町方面にかけて入り込んでいる[10]。この様相は近畿中央部方言におけるヘンが周辺へ伝播し、ンを次第に淘汰しようとする動きであるということができる。このヘンの侵攻は更に西へと進み、吉野川流域においても、かつて近畿中央部方言で生じたン→ヘンの変化が完了する時期が将来訪れると予想される。

現在、例えば、イカンとイケヘンの両形を併用する話者は当地域で相当の数にのぼると思われる。鴨島町西麻植（13）の話者によると、イカンの使用は男性に多く、女性はむしろイケヘンをよく使うと内省[11]しており、この報告はヘンが進行する過程で、男性よりもまず女性に受容されやすいということを物語っているものと解すことができよう。

因みに、大阪～徳島間のグロットグラム調査の報告として、池西郁広・富家淳夫ほか(1993)では大阪市から明石市間、明石市から淡路島の南淡町に至る地域にはンよりもヘンの方が圧倒的に多いことが示されており、従来、ンの領域であった徳島市・小松島市・阿南市にもヘンが流入している様子をみることができる。

関西中央部方言が徳島方言に影響を与えているという事実はその他の例からも明らかである。例えば、断定の助動詞「だ」に相当する形式として、徳島方言ではジャが優勢であるが、徳島市内を中心に特に若年層ではジャよりもヤをよく用いるようになってきている。言い切り（＝終止形）の場合などは確かにまだヤが根付いているとは言い難いのかも知れないが、例えば、「子供なのでよく分からなかった」というような場合には、子供ジャケンというよりもむしろ子供ヤケンということが、特に徳島市内などで多い。**表7**のグロットグラム調査結果ではこの子供ヤケンという新形式が子供ジャケンという旧形式に取って代わっていこうとする様相が映し出されている。徳島市内では高年齢の世代でもジャケン→ヤケンへの変化

---

10）　ヘンの他、「見ない」ではヒンという形式（ミーヒン）も徳島市で現れている。これはミーヘンから変化したものと考えられる。ヘンに先行する母音がｉ音であることから、順行同化によって生じたとみられる。

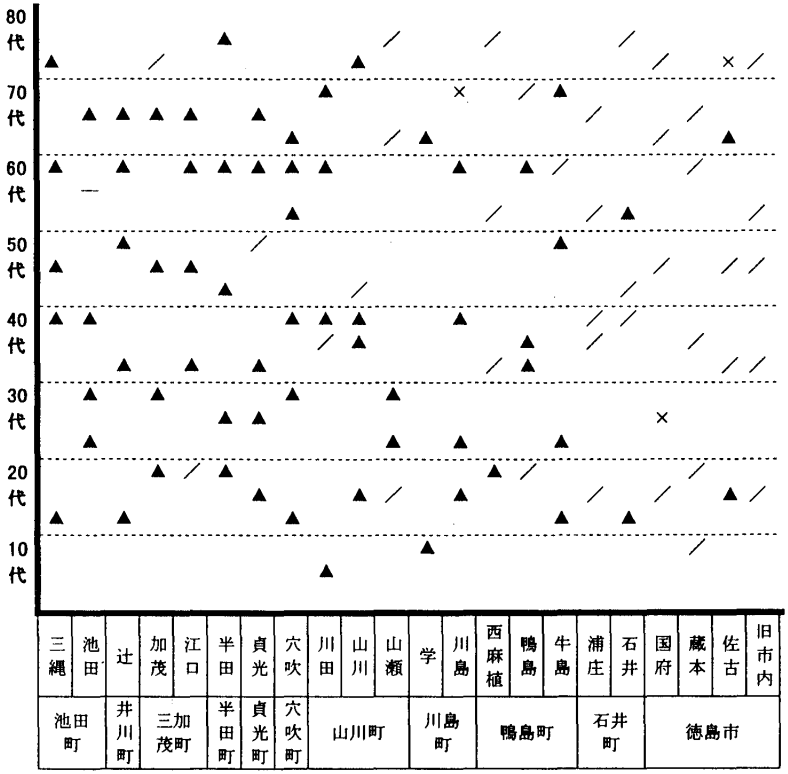
11）　この報告以外にも、鴨島町鴨島（13）の別の話者によると、イカンとイケヘンでは意味が異なるという報告もある。イカンが強く打ち消す場合で、イケヘンはイカンに比して打ち消しの度合いが弱いという種の報告である。この点の注目すべきところは、大阪でかつてンとヘンが併用された頃に報告された内容と酷似している点である。この点で述べておきたいのは、Ａという言語形式がＢという言語形式に接触したとき、瞬時にＢが消えるというケースは稀であり、しばらくは両形式が共存することが多いと考えられる。注９でもみたように、一つの意味を表すのに、２つの言語形式が存するのは不合理であるということから、強消・弱消といった意味の分担が行われたと考えられる。

## 吉野川流域・南岸（徳島市～池田町間）方言グロットグラム

*徳島大学国語学研究室*

〔項目名　行かない〕　　*1998*

質問：「今日は仕事に行かないよ」という時、「行かない」の部分をどう言いますか？




凡　例

▲ イカン　／ イケヘン　― イカナイ　× その他

表　5

がほぼ完了しようとしている。徳島市内からヤケンは吉野川を遡っており、西に向かうほど、使用する世代が若くなっていることが分かる。すなわち、地理的な伝播として、ヤケンは徳島市内から西へと進行するが、まず襲うのはジャケン専用地域の若年層であるということである。

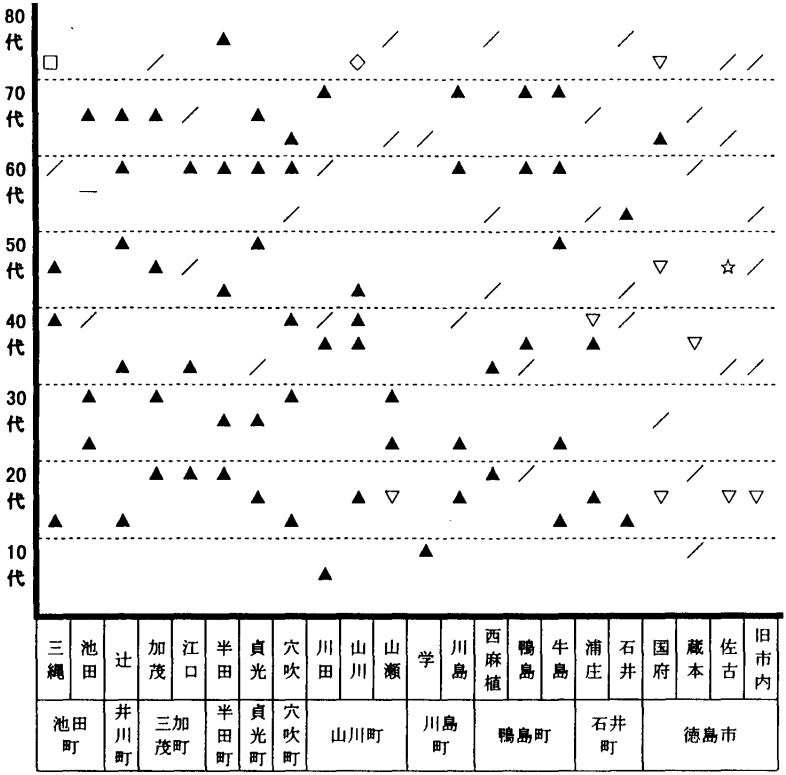
ちょうど**表3**でみたオキレンの西進の状況とほぼ同じであるということができよう。ヤケ

## 吉野川流域・南岸（徳島市～池田町間）方言グロットグラム

*徳島大学国語学研究室*

〔項目名　見ない〕　　*1998*

質問：「今日はテレビを見るか」と家の人から聞かれて、「見ない」と言う時、「見ない」のところをどう言いますか？




凡　例

▲ ミン　／ ミーヘン　▽ ミーヒン　☆ ミエヘン　◇ メーヘン　— ミナイ

□ ミヤヘン

表　6

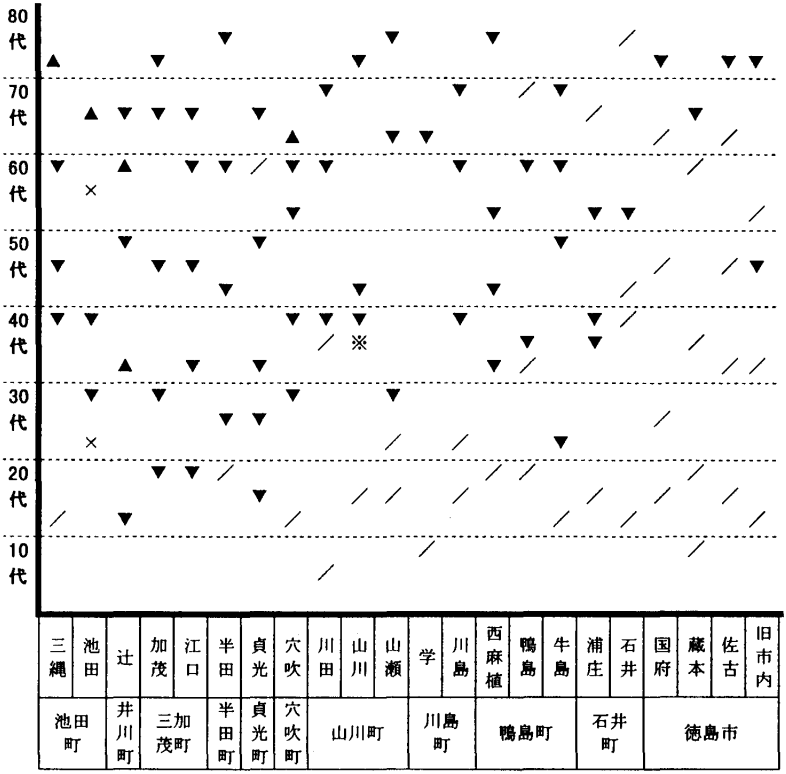
ンにみられる断定の助動詞のヤの出現は先のイケヘンなどと同様、近畿中央部方言の影響であると思われる。今後、この影響力は明石大橋の開通に伴って、更に強力になっていくことが予想される。全国共通語化に言語変化と相俟って、このような地方共通語化がますます進展すると思われる。

## 吉野川流域・南岸（徳島市～池田町間）方言グロットグラム

*徳島大学国語学研究室*

〔項目名　子供なので〕　　*1998*

質問：「子供なのでよく分からなかった」という場合、「子供なので」の部分をどう言いますか？




### 凡　例

▼ 子供ジャケン（子供ジャケニ）　▲ 子供ジャキン　／ 子供ヤケン（子供ヤカラ

※ 子供ダカラ　× 子供ナノデ（子供ナンデ）

表　7

### 参考文献

平山輝男（1957）『日本語音調の研究』明治書院

森　重幸（1958）「徳島県のアクセント概観」『神戸大学国文論叢』7号

加藤信昭（1968）「境界地帯におけるアクセントの問題―吉野川流域を中心として―」『日本方言研究会第

6回発表原稿集』日本方言研究会
前田　勇（1977）『大阪弁入門』朝日選書80　朝日新聞社
森　重幸（1982）「徳島県の方言」『講座方言学8　中国・四国地方の方言』国書刊行会
山本俊治（1982）「大阪府の方言」『講座方言学7　近畿地方の方言』国書刊行会
関口美智代（1988）「一拍名詞第一類・一拍名詞第三類・三拍名詞第四類における徳島型アクセントと池田型アクセントの境界線について」徳島大学教育学部・昭和63年度卒業論文
森　重幸（1989）『徳島県の方言アクセント概観－32年後の動向－』私家版
高橋顕志（1990）『四国言語地図』高知女子大学文学部国語学研究室
高橋顕志（1991）『四国言語地図』高知女子大学文学部国語学研究室
池西郁広・富家淳夫・西本博子・藤川輝紀・宇都宮久・中村誠・野川紀幸・山下明子（1993）『大阪～徳島グロットグラム図集』鳴門教育大学大学院‘93現代語演習（友定賢治担当）
香川県方言研究同好会（1996）『さぬきのおもしろ方言集』松林社
上野和昭（1997）『徳島県のことば』日本のことばシリーズ36　編集代表　平山輝男　明治書院
小野米一編（1998）『徳島県脇町方言調査報告』鳴門教育大学　国語学（現代語研究）報告4

（文責　岸江信介）